SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

まえがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野, 旭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7044

まえがき

個人的な事で恐縮ですが、私はモンゴルの草原に生まれ育ち、二十歳くらいまでは、かの地で暮らしていました。1986年4月26日にチェルノブイリ原発事件が起こった時も、草原に滞在していました。近代化が遅れ、ようやく電気が通った直後の草原で、テレビのブラウン管に映るあの出来事を眺めていたと記憶しています。黒々と濃煙が立ち上るなかで避難する人々も遠い世界の存在で、さほど現実感をおぼえることはありませんでした。

チェルノブイリ原発事件そのものよりも、当時のソ連とアメリカ、それに中国といった超大国がどちらも核兵器を手にして互いを威嚇し、核戦争が勃発寸前だった状況のほうがはっきりと頭に刻まれています。なにしろ、私が生まれた1964年に、中華人民共和国は最初の核実験を「成功」に導いています。それも中国人が暮らすところではなく、ウイグル人の故郷である新疆で強行されたものでした。中ソ対立が激しくなっていた時代で、核戦争に無辜のモンゴル人やウイグル人たちが巻き込まれるのではないか、と人々は危惧していたそうです。

チェルノブイリ原発事故はすでに弱っていたソ連の解体に拍車をかけ、世界最初の社会主義国家は歴史の彼方へ消えて行ってしまいました。しかし、社会主義の遺産はまだ各地に残っています。旧ソ連から分離したカザフスタン共和国の東部にあるセミパラティンスク核実験場と中国新疆ウイグル自治区にある核実験場、それに青海省にある実験施設の跡地などを私は歩き、その後遺症の実態に触れたことがあります。なかでも特に青海省の核実験地周辺では白血病や癌患者が多く、三本の角を生えた家畜などが出てきている、という証言を集めたことがあります(楊海英著『モンゴルとイスラーム的中国』、2007年、風響社)。人類は核というたいへん扱いにくい「文明の利器」を手にしたものの、その発明をどのように使うかが、ずっと問われつづけているのではないでしょうか。

旧ソ連と中国といった社会主義国家と比べますと、戦後の日本は健全な民主主義の道を歩んできました。原発の平和的な利用もそれを物語っています。しかし、東日本大震災を経験した今日、ふたたび「主義」を超えて原発の問題がクローズアップされるようになりました。なかにはイデオロギー的な理論を先行させているような論調もあるようですが、民主主義国家日本と、専制主義国家との差異をじゅうぶんに認識しているかどうか、私は心配しています。

静岡大学人文社会科学部(旧人文学部)社会学科文化人類学講座は毎年、県内において現地調査を実施し、報告書をまとめる作業をつづけてきました。今年は御前崎市浜岡町を勉学の地に選び、地元の方々にお世話になりました。フィールドワークに参加したのは旭真里奈、畝重将矢、梅田舞子、大竹駿太朗、小池美紀、佐伯英朗、佐藤瑠美、志田芙似子、仲村実祐、丹羽佑太、茂庭可奈子、森下奨士、藪中美耶子です。国論が二分しているといっても過言ではないような激動の時期に、地域の識者たちから得られた見識は若き学生たちの一番の精神的な支えとなるでしょう。現地での経験は私たちの思考を深め、これからの社会活動に役立つものとなるにちがいありません。(大野旭＝楊海英)

静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース
大野旭　原知章
2012年12月吉日